



六日廿六日 大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

大關山會館...

山 七 八 一

第 二 號

(大正十年六月)

— 第二號 目次 —

雜 報

記 事

海 豹 島……………並 河 功(一)

登山流行の心理的考察……………六 鹿 一 彦(五)

飯豊山の登路に就いて……………板 橋 敬 一(八)

圖 版

海豹島略圖及スケッチ……………並 河 功(三)

„Der Skifahrer“ 及び……………(九)

■第三高等學校山岳會は六月十一日講演會を開催郡場寛外數氏の講演があつた相です。

■慶應義塾體育會山岳部では既に今夏の計畫の發表がありました。飛驒山脈方面へ六隊、木曾山脈方面へ一隊、赤石山脈方面へ三隊、其他二。尙滿鮮支方面へ一月餘の旅程が組立てられて居ます。

■東京附屬中學校桐陰會山岳部は七月廿日より約十日間、長野縣平隱村發補琵琶池附近で天幕生活をしながら、白根其他附近の山岳を跋渉する相です。参加者六十名、天幕十一張

■北海道帝國大學附屬大學豫科旅行部は近く全道並びに東北地方にわたり夏期旅行の計畫を發表する筈。

■小林達也、笹川速雄氏等はスキー及登山用具の製作改良の爲め今東京で着々準備を進めて居られる相です。

■日本アルプス燕岳の御花畑に接して燕小屋、槍澤の奥に大槍小屋が本年新設されました。大槍の小屋は六十人を收容するに足り槍の頂上まで一時間で行かれる相です。

■慶應山岳部刊行の『登高行』は近日中に發行されます。大島亮吉君の石狩岳縦走記が掲載してあります。

■六月廿六日、大阪中央公會堂に於て山に關する大講演會が開催せられます。近來にないすばらしいものだ相です

海豹島

並 河 功

八月三日(一九一四)の午後、樺太の東海岸にある富内^{トシナイチヤ}を出發してから、三百噸餘りの巡邏船はオホーツク海の波に揉まれ揉まれながら、一向に海豹島に向つて走つた。一晝夜の後、濃霧の中で船は一所をグル／＼遊弋し始めた。船長は『最早此邊にある筈だ』と云つて居る。島を捜して居る霧なので、島も中々見付からない。臘胸獸の安臥を脅かさぬ爲めに此邊では汽笛は鳴らされない。假令鳴らしたところで島から答へる術も無い。只盲捜しに捜し出す外は無。船長は眼の色を變へ、身体中の神経を尖らして船橋に立つて居る。甲板に居ると波を浴せられる恐があるので船室に逃げ込んだ。其中に日が暮れた。

五日の朝起きて見ると、甲板や船橋にボンヤリ日が差し居る。空を仰ぐと檣の上に青空が見ゆる。しかし霧はまだ大分深い。船橋に上つて見た。今朝は船長が穏な顔をして居るので『晴れるな』と云ふ事は直ぐ譯つた。船は矢張一つ所に色々な曲線を描いて遊弋して居る。波も大分靜になつた。と左舷に當る霧の中から『オーイ』と人の呼ぶ聲が聞ゆる。耳をすましたが後は聞えない。斐すると別な方角から又『オーイ』と呼ぶ。『人の呼聲がするぢや無いか』と、平氣な顔をして居る船員に訊いて見ると、『ロツベン鴨の鳴聲だ、最早近い』と答へた。海豹島は又の名をロツベン島とも云つて、今呼んだ聲の主が非常に澤山棲んで居るのだと云ふ。

行手の霧が晴れて陸地が一丈見えた。望遠鏡で見ると、流木の打上げた砂濱と、夫に續く綠色の丘陵が見える。白塗の帆船が、胴中を傷められて濱に打ち上げられて居るのをチラと認めた時に、霧の幕は再び引かれてしまつた。夫でも之が見えたので、船員には船の位置が譯つた相だ。彼の船は誰とかの持船で、何時難破したのだとか云つて居た見えた陸地は北知床岬の西の濱だつた。方角の付いた船は黒煙を擧げて元氣よく走り出した。段々空は明るく、波は



靜になつて來た。
 正午少し前頃、船員が『鳥の音が聞ゆる』と云ひ出した。『鳥の音』は珍らしいと思つて氣をつけると微にゴーといふ様な會体の知れぬ響がする。譯は後で解つたが、臘豚獸の叫、ロッベンの鴨の鳴聲、其羽音、波の音等が一所になつて遠くからも一種の響が聞かれるのである。音は少しづつ近付いて來る。

午後船は霧中の騒音を前にして錨を下した。妻の後、晴れ残りの霧が軟風に拂はれて、午後の日を浴びた島形が忽然と眼前に現はれた。船は島の西一哩半程の所に投錨して居つたのである。上の平な岩丘、其上に立つ三角點、數棟の露西亞式の建物、濱に茂る綠草、塵埃の様に數多く飛び交うロッベンの鳥の群などが、明瞭と美しく認められた。

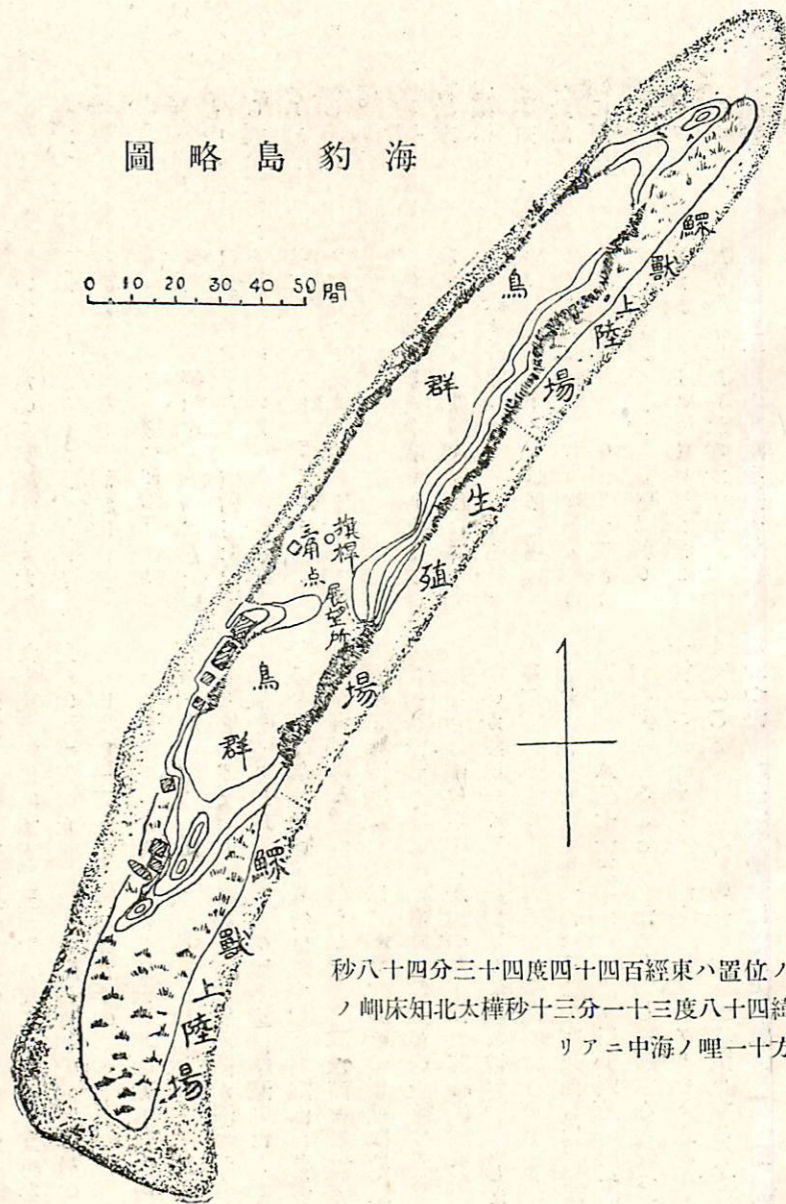
程なく島からボートが來た。岩の上から、昨日船の煙が一寸見わたが後で見えなくなつた相だ。今日は朝から霧の中にウロウロして居るのが煙の動き方で解つた相だ。ボートの中でこんな話を聞いて居る中に島の西側の小石ばかりの濱に着いた。

小さな島だ。長さ四町、巾は一町に足らぬ。夫が東北から西南に向つて横はつて居る。中央には、上の平な三紀層の岩層が突立つて、其周圍に少しの砂濱がある。岩の高さは五十尺位もあらふか。西側の崖の基部に沿うて巡查や監守夫の合宿、物置、事務所等がある。何れも露領時代からの建物である。薪にする木もなく、飲料水も出ない島で、住民は無論無い。役人の食料や薪炭は全部敷香や散江から運ぶのだといふ。島の監守に來て居る人は全部で二十人餘り、夫に相當した小銃と彈藥は具へてあるが『少し氣の荒い密獵船でも來たら仕方ありませんや』と、巡查部長が心細相に云つて居た。

岩の上に向つて見た。南北二ヶ所にある岩上の廣場に、ロッベン鳥が黒い背丈見せて、地面の見えない程に密に佇つて居る。卵を抱いて居るのだ相だ。一坪に百羽以上も居る。未だ此の外に、空中にも、海濱にも、水面にも、飛んだり、遊んだりして居るのが大變に多い。此鳥の背は黒いが飛んで居るところを見ると腹は眞白だ。春監守が此鳴に來る頃に岩に向つて見ると、一坪に二百五十粒以上の卵があると云つて居た。臘豚獸の島に來る前に此卵を採つて置

海豹島略圖

0 10 20 30 40 50 間



島ノ位置ハ東經四十四度三十分八秒
 北緯八十四度三十分一十三秒
 北緯八十四度三十分八秒
 南緯一十一度中海ニア

し、翌年からは獵期中十數名の海軍々人を島に置いた。所が十月中旬之等番兵の引上げた後を襲ふ獵船もあり、又番兵自身も随分密獵をやつたらしい。斯様にして臘肭獸は減る一方なので露米商會では千八百八十六年から千八百八十九年まで獵獲を禁止し、其後も獵獲數を激減した明治卅七年には下サクサ紛れに日本の獵船が襲撃して兩年で六千頭ばかりの獵獲をした。三十八年には軍令を以て獵獲が禁止せられ、翌年は憲兵若干名が島に特派された。四十年には禁獵の勅令が出て、樺太廳の巡查及備人若干名を派して監守せしむることになった。只免許獵船には島の周圍三十海里以外に於て獵獲することが許されて居る。こんな風にして今日も尙島は監守されて居る。島に上陸したものは先づ最初に次の揭示を讀まされる。

登山流行の心理的考察

- 記
- 一、觀覽者ハ食料品ノ外物品ヲ携帯スベカラズ
 - 二、許可ヲ得ズシテ島内ニ存在スル鳥卵砂石鳥骨等ヲ持去ル可ラズ
 - 三、臘肭獸棲場所及其附近ニ於テ火氣ヲ弄シ又ハ喫煙シ或ハ吸殻等ヲ投棄スベカラズ
 - 四、鴨所在ノ場所ニ在リテハ十間以上ノ距離ヲ保持シ近寄ル可ラズ
 - 五、鳥獸ヲ追ヒ又ハ驚逸セシムベカラズ
 - 六、本島ノ狀況ヲ撮影若クハ寫生セントスルモノハ監守員ノ承認ヲ受ク可シ
 - 七、觀覽ヲ終リタル者ハ直ニ退島ス可シ
- 右違背シタル者ハ處罰セラルベシ
- 年 月 日
- 樺 太 廳

前世紀の半までは惡魔や妖靈の棲所であるて恐れられて居た山岳が、今日の如く一種の行樂地に化したのには種々の原因を探し出す事が出来るであらう。科學の進歩富の増加交通の發達欲望の進展等兎に角文化の發達した云ふ

事が原因ではあるが、今日の如く人心を惹き寄せる事の強大なる理由は、近代文明が近世の人間の心の中に涌き起こさしめた或る特殊なる心理状態に依るものが多いと思はれる。以下少し此の點に就いて考察して見度い。

六 鹿 一 彦

いて夏中の食料にする相だ。後で標本にと云つて其卵を數個貰ひ、又卵の茹でたり、焼いたりしたのを御馳走にもなつた。卵には糞がついて居て鼠色に汚れて居たが、洗ふと暗青色や褐色、黒色等の模様が現はれて来る。地色は白色灰色、淡青色、淡褐色等で、色の變異は複雑で美しい。卵の味はあまり旨しくは無い。鳥は卵を抱いて居るので人が側に近付いても中々逃げない。流石に手掴みには出来ないが、岩の上から逐ひ立てると飛翅の姿勢を取る間も無く雌から轉り落ちる相だ。雌の下に待つて居て、落下中姿勢を正し、海に向けて飛びはじめるところを棒で撃てば何羽でも獲れる相だ。崖の側面の罅には鷗が澤山巢を造つて居る之等の外鳥の種類は多い。之等が臘肭獸の御産の時に出来た不淨物を皆始末して終う相だ。鳥類は臘肭獸を恐れず、臘肭獸も鳥を嫌は無い。ロッペン鴨が群を爲して飛び立つと。臘肭獸も警戒して海に入る。こんな關係から此鳥類も臘肭獸同様此島では大切に保護せられて居る。

岩上の東側に石を積み上げて堡壘の様なものを作つてある。之が展望所である。積み上げた石の間から覗くと東の濱一面に上陸して居る臘肭獸が見られる。少し時季が遅かつたので、一夫多妻の大家族の壯觀は見られなかつたが、夫でも巨大な牡の周圍に十頭乃至二十頭の牝獸を控へた數團の大家族が奇觀を呈して居た。ハーレム以外の場所では濱一帯に雜然たる群集をなして居た。濱近くの海中には多

數の幼獸が僅かに背を見せて魚の如くに群らがり遊びで居た。東北端には海馬が三頭波打際に日向ボッコをして居た。此島の臘肭獸の上陸數は年々増ゆる相で、監守員の話では其年には約一萬頭の上陸を見たとのことであつた。此島が臘肭獸の棲息地であると云ふ事の知られたのは今から六十數年前で、或る米國の捕鯨船に始めて發見せられた。其後捕鯨船の爲めに年々數萬頭の臘肭獸が濫獲せられ、千八百五十五年には殆ど此島の臘肭獸は絶滅したと云はれて居る。隨て其後は獵獲も行はれず、臘肭獸は再び増殖して來た。十四年の後(千八百六十九年)露米商會の船が此島に來た時には、獸群は沿岸に滿ち、多數の鯨は島の高所にまで匍ひ上つて居る様な有様で、船員の上陸する爲めに臘肭獸を逐ひ除ける必要があつた相だ。其時は獸群の餘りに多いのが氣味悪くてか、獵をせずに船は出帆してしまつた。翌年二隻の帆船が密獵に來て、仔獸約六百頭を残し、他を殆ど全部殺戮してしまつた。そこで露米商會は二年間獵獲を禁止、千八百七十三年からは年々三千頭乃至四千頭の若牡を獵獲することにした。しかし禁獵すると云つても、一隻のスクーナ型帆船と、數名のアリウト人を残して置くこと、密獵船の掠奪を完全に阻止することは出来なかつた。諸國の密獵船は函館で艦裝し、英、獨、蘭、米等の國旗の下に堂々と掠奪に出かけたとの事である。露國政府は千八百八十四年に軍艦を派して數隻の密獵船を拿捕

來た。しかし又一方に於ては此の絶えざる刺戟の連續から逃れて、靜に興奮し過ぎた神經を休めたい云ふ欲求がある。離隔せられた自然に對するあくがれもある。其の結果として自然の風物に接し度いこの希望があるが、此れも穩和な靜安な景色では到底物足りなくて満足が出来ない。だからして雪や氷に閉ぢられた、極めて色彩多形象の變化が大きくて刺戟の強烈な山岳へ足の向く様になるのも無理はない。山岳では總べての物が強い、大きい、粗つぽいそれだから現代人の嗜好に適するのである。

更に考慮に加ふ可きは自由主義の思想である。自由の要求は古來種々の方面に向つて叫ばれたが此處で考ふ可きは個性の自由に對する欲求であつて、之が又登山流行の心理に關係があるのである。現代の社會制度組織に不満を反抗の聲を擧げて、束縛された個性の自由發展の地を探索して得たものが山岳であつた。山岳に於ては總べての人が現代社會を支配して居る法律上、社會上、經濟上の差別を撤廢して平等となり、自由なる個性の活動を許すのである。尤も俗物共が山岳へ多く入り出すに、此の差別をつけたがつて困るが、山岳の本然の性質は平等であつて、俗社會の厭はしい階級や差別はないものである。其の懐に入る者は悉く同じ平等なる自然の兒である。登山によつて社會的苦痛を不満を掃する云ふのは、恐らく此の時の心理狀態を云ふのであらうと思ふ。

以上は現代人が登山を要求する心理であるが、之が流行する事今日の如きに至つた理由としては次の原因を掲げねばならぬ。即ち現代人の愛新性が著しく強大となりつゝある事、及社會公衆の感興を惹きつゝある事物には己も興味を懷き、公衆の思想を自らも持ちたい云ふ公衆心理の發達した事この二つに依つて助けられて居る云ふ事である。従つて登山云ふ一の流行の發達普及が急進的であり、普遍的である。即ち若し此の二つが存在せぬならば、登山云ふ様な或る特殊なる個人的趣味が社會全般の感興を呼び起し、今日見る如き盛大なる流行を來す譯には行かない。愛新性は模倣性を導き出して流行の基礎を作り、公衆心理は新聞雑誌の力によつて此の流行を普遍的にしたのである。だから登山の流行云ふ點が見るに此の二事が最大切なる要素をなすのである。

近來注意すべき傾向は、一般思想界に於て現はれ來つた新理想主義、神祕主義に支配せられた爲に、登山心理に宗教的及び藝術的傾向の増加しつゝある事である。宗教的意義を含む登山は、登山云ふものが行はれた最初の動機であつた事は東西共に其の軌を一にして居る。大古の事は問はずとも、釋迦はヒマラヤ(雪山)に入り、キリストはシナイ山上に叫んだ。日本の登山は役小角によつて開かれたものであるを思へば如何に登山が宗教と關係を深く有するかと明である。特に日本に於ては行者なる者によつて導か

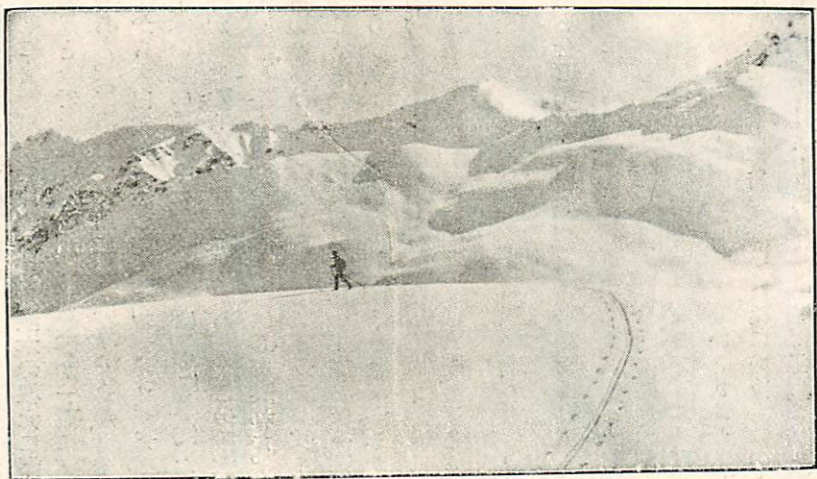
先づ第一に科學に對する絶對的信賴と尊重の心を擧げねばならぬ。しかも之がスポーツとしての登山が行はれ始めた最初の動機ではあるまいかと思はれる。科學的興味の奴隷となつた學者達が山岳をも科學的研究の對稱物とし、生物學や地質學や氣象學上に貴重なる發見をなして學界に貢獻する處が少くなかつた。そして其等は悉く目新しい題目であつた爲に著しく社會の人心を惹きつけた。科學萬能を信じて居た人々は此の新しい學者の研究に滿腔の信賴と尊敬を捧げたものである。新しい物を尊敬する時には其れに對する模倣慾が起きる。之が即ち流行である。斯くして素人水河學者が出来、高山植物採集家が出来て來た。此等の人の登山云ふ事が一般人士の好奇心と模倣慾とをよぶつて次第に一大なる流行を作る基礎をなしたのである。近代思想に一大感化を與へた唯物主義の科學尊重は、登山にも亦大なる關係を有して居るのである。

次に登山流行の因をなした心理を云へば、近代文明が作り上げた都市生活の反自然的傾向に對する反抗心、解放慾である。即ち簡易生活の慾求で天然生活に對する憧憬である。だから登山が最早且盛に行はれたのが、近代的都市の最早く又最完全に發達した英國に於ける人々の間である事によつても明である。即ち英國のアルパイン俱樂部は一千八百五十七年に世界最初の山岳會として設立せられたものである事を見ても窺知する事が出来るであらう。シルク

ハットやコルセットの生活者が其の内的慾求の目醒めに際して擱んだものは登山であつたのである。

享樂主義も亦登山の流行を助けたものと思ふ。官能的慾求の充足に全力を注いで、快樂の永續によつて幸福を求め其處に人生の意義を見出そうとした人々は、己が生活の環境を作るあらゆる事物に依つて得らる可き歡樂を味ひ盡しても尙不足と不満に驅られ、何物か此の慾求を滿たして飽滿の感覺によつて淡い幸福を與へられたいと願つて遂に一つの新しい登山を得たのである。眞に登山者は一の享樂主義者である、少くも登山中は然りである。苦痛、不自由、危険の中に自らを置いて、其後に來る可き歡樂の味を唇一層濃厚にして之を貪らんとするのが登山者である。而して人生を享樂主義者の眼より眺める時には、登山も亦一の歡樂であり、従つて道徳である。

近代文明の著しい進歩と共に、生活は各々目まぐるしい位に其の複雑さを増して行く。そして機械に急ぎ立てられて終日狂人の様に働き通す現代人の神經は常に苛だち、興奮して居るので、餘程強烈な利刺戟を受けなければ感興を起す事がない。だから生活の壓迫と苦痛とから逃れて或る慰安を求め歡樂を追ふにしても、靜な弱い刺戟に依つたのでは到底駄目である。それだからして繪畫も音樂も演劇も、皆強烈な印象的な表現法をこる様になつて來、特に最強の刺戟で且利刺戟の興奮である性慾の方面が目立つて



れる御岳教其他の山岳宗教に於ては純然たる宗教的意義に於ての登山を行つて居る。しかし此處に云ふのは所謂山岳宗教の目的とする素樸なる信仰よりするのとは異つた意義に於ての宗教的氣分の加はつた登山心理を發見するのである。元來宗教云ふ定義も難しいものであるけれど、假に『自我以外に或る絶対權威者を認識する』云ふ心理状態を宗教心とするならば、登山心理に此の心の侵入の傾向を認める事が著しくなつた云ふ事が出来る。しかも之が藝術に對する憧憬に結合して次第に登山者の心を浸しつゝある事を感じる。此の傾向が根ざす處は新理想主義及び神秘主義の勃興に依るものであつて、科學に對する期待の無慘なる破滅と現實のみに頼り得ぬ心の不安から生じたものと思はれる。造形藝術は靜的であり音響藝術は動的であ

る云ふが、山岳の藝術的價値は此の兩者兼ねるものである。太陽の輝き、雲の流れはそより立つ山嶺と共に造形藝術の精華を作り、雷霆のはためき、峰風の唸りは音響藝術の粹美を爲すものである。此の藝術によつて信念の據り所を失つて不安の境に漂ふ現代人は辛ふじて心の平靜を保たんとするのである。しかし之を根本的に救ひ出すのは宗教であらねばならぬ。崇高の感、偉大の感、悠久の念は悉く宗教心を刺戟して人をして絶対權威者を求めしむるものである。故に斯る藝術の上に立つて其の歸趨を指示す山岳の宗教的意義に觸れ様々希つて登山する人々が次第に増加せんとしつゝある。此處に於て吾人の心に映する登山は一の科學であり、道徳であり、藝術であり、又同時に宗教である。

飯豊山の登路に就いて

板 橋 敬 一

飯豊山稜は東北地方の驚異であらねばならぬ。大きな山容とその包括力には自づと敬虔の念が湧き出て来る。数多い登路も従つて福島、新潟、山形の三方面より記述して行くこととする。

——福島縣方面——即ち會津口と稱して、沃野の人々は陸續と信仰により精進して登り行く。これも一ノ戸口、彌平四郎口の二方面よりする。

一ノ戸口は盤越線の山都驛より三里の一ノ戸部落より登

て行くが先年等は反つてこの附近の灌木帯にまぎれ込んで人が死んだと云ふことである。この附近の石室の感じは好い。ヤマハコ、マツムシサウ、ハクサンチミナヘシ、ヤマノエンドウ等に圍まれて一面に明るい陽を浴びてゐる室の主人も親切である。幾つもの峯を越えた後に漸く頂上に出る。神社があり立派な小屋迄ある。

眺望は絶佳である。佐渡、粟生の二島、信濃川平と彌彦山、村上平等は西方にはつきり現はれ、小國の谷の頭には鳥海、朝日、月山が巖然としてゐる。藏主も米澤平野も吾妻も盤梯も猪苗代湖まで見ゆる。會津盆地の先には日光、利根の上流地方の連山が見渡される。去年登つた時この大觀に接して茫然として了つた。

彌平四郎口に再び歸つて行く。德澤驛から五里余林區の軌道に沿つて登つて行けば彌平四郎に入る。木地引が多く何とかの落人とも云れて居る。澤を登ると長坂にかゝる。然しこの道には全然小屋は無いし展望も利かない。一日尾根を下りて残雪を降り大日布澤の上に出ると案外樂になる氣持のよい道が三國岳に續いてゐる。要するに平凡な道である。

山麓の奥川村の玉木靖一氏は飯豊植物の泰斗でありその態度には全く敬服して了ふ奥川村から山越に越後の實川に出この上流から大日岳へも登り得るさうである實川の部落も猪俣氏の隠れた所で一種の大家族制度をとり面白い風

習がある同じ越後の小池氏の隠た三面オモテと共に有名である。實川の表川と裏川との落差は鋭い細谷をなして奇觀である

新潟縣方面——新發田から五里の赤谷村から加治川の峡谷を過るのである。この紀行は『山岳』三年三號に大平氏が精細に書いて居られる。蓋し飯豊登山路中の難所である。矢張り大平氏と全く同様に湯の平温泉と洗濯澤に露營して登つたのであつた。加治川の沃野は米の質の良いこと有名である。鐵道が赤谷迄近いに開通し鐵山の大大的採礦を始めるさうである。實際飯豊を中心として附近に礦産物の多いことは驚く程である。昔はこの道は盛つたさうであるが今は全然登山者がなからして案内者を必要とする。片野治三郎爺は七十近かつたが實に確實であつた。然し人夫もこの道を厭ふて居るらしい。實際ひさい。尾根に出る。御池附近から西ヶ岳へかけての山脊は濕地であつて非常に美しい御花畑を呈してゐる。會津駒と類似點を見出すのである。

山形縣方面——米澤口の岩倉からの登路と小國方面の東瀧よりの登路は地蔵岳に合して切合せに出て來るのである米澤口からも年々相當に信者は登つて來る。

米澤平野から西走してゐる越後街道沿ひの小國村から眺めた飯豊の山容は全然會津、越後方面とは比較にならぬ程

るのである。此處には行者の爲のみの宿屋が二十軒も並んでゐる舊の盆前後はその人達は未明に宿を出て絶頂の神社に詣で夕方迄に下山して了ふ。精進ときで大騒ぎをされる時等は厭になるが道は實際立派である。二里行つた所に木地引のみの川入部落があり、こゝから大白布澤を登つて御澤でこれと別れる。長坂と云つて木の根の露出した、針潤混淆の樹帯の間をぐんぐん登り行かねばならぬのである。途中小屋は五、六個所あつて一々參詣者に手を灑がせ水錢をとつて祠を參拜させる。勿論相當の食料品はあるから或る點では面倒であるが、案外便利なこともある。登りつめると地蔵山の三角點に出る。こゝから少し下つて三國岳に登る劍峯の岩にとりかゝるのである。鎖の下つてゐる等は面白い。途中弘法大師護摩所と云ふ附近から大白布澤に向つて岩が平板状をなして走つてゐるが昔の『太陽』に氷河の痕跡等と書かれたのは疑はしい。斷層の條線ではないかとも思はれる。三國岳で彌平四郎道と合して、本山に續く尾根の起伏にとりつくやうになる。キンレイクツが美しく雪窟に面して咲いて居る。よく行者の下りて來るのに逢ふと『御山は晴天』と浴せかけられる『好い日に御參詣』と決り文句を歸してやる。人と人との交渉は至つて簡單なものである。峯をいくつも上り下りをやつて種蒔山に出る。一体この山は米とか二百十日とかに餘程關係して居るらしく種蒔の小屋の傍には苗代があつて白米が浸つてゐる。マ

イズルサウとかゴゼンタチバナ等の名を覚えてゐる植物が灌木の根元に澤山咲いてゐる。尾根をからみ始めると直ぐ残雪が一面に道を被ふやうになる。ハクサンチドリ、キンバイサウが出て來る。殊にナンキンコザクラ、イハカバミアナノツガザクラ、チングルマ等の群落の美しさに致つては何とも云へない。切合せと云ふ所で米澤口の道と合してゐる。この附近に野生してゐる百合の根をよく室の人は食はして呉れた。雪は無性に多い。雪解の後にはシラネアフリ、ノギラン、ダイヤモンデサウの咲いてゐるのが氣分をそよよとて來る。草履塚と云ふのがあつてこゝの室の主人は吾々に草鞋を穿きかゝるか笹の滴で清めることを要求する。こゝに草鞋の主は早朝から參詣者を注意してゐるから晝過ぎは大抵寝てゐるので幾度も煩はされずに済んだ。イハイテフ、イハワウギが咲いて居り、エーデルワイスは澤山に群がつてゐる。大又澤と豐實川上流の深い谿谷が右左に見え非常に興味がある。豐實の谿には残雪が長く延びて頂上から大日岳へかけての夥しい雪原がその上を巡つてゐる。大日岳は雄大な犯し難い容貌で睨み返して居る。心は一途に向つて了ふ。羽黒の行者が『大日へ行つて歸つて來た人はないと云ふからね』と神秘的な眼で云つたことも浮んで來る。兎に角懐しみのない山である。やがて御秘所と云ふ所に出る。道は山橋と云つて斷崖の上を傳ふ道と中程を獅嘴みついで渡る所とある。行者は身の穢れを試る爲に中腹を這つ

六月の野をその清浄な色と香に搖ぎ眼醒ます鈴蘭の花が、まだ青い初衣を脱ぐ前に無慈悲な人々の醜い手にむじり取られてしまふのは遺憾にたえない。どんなものをも自分の支配下に置こうとする人の性情は咲きもせぬ鈴蘭の可憐な姿を汗ばんだ手に萎れさせる。札幌の近郊に生ねるものは誠に不幸である。

自然は、山も野も雲も。一切の自然は大きな調和のうちに存在して居る。智慧や技巧を超えて遙かに高く、それに人はひたすらに此の均衡を破るふとして居るのではない。もつと考へればならない。自然と人とは對立するものではない『踏破群山高嶺』などは甚しい妄言だ。雨を悲しみ風を憎む前に吾々は此の無限な永劫な自然に涙ぐましい心持であらねばならない。

旅の期節が來ました。皆思ひ思ひに旅に出られる事です。此の空を仰ぎ此の野を見渡してはちつとしては居られないのは當り前です。勝手乍ら編輯の都合上續刊發行の日は大体次の様になるだろふと思ひます。(かの生)

第三、四號 七月一日頃

此の雜誌は山岳、スキー、旅行に興味を持たるる人々の有効な機關雜誌として考てあります。勿論吾々の様な微力な者では充分な事は出来ませんが、廣く各方面の人々が此の雜誌に好意を持ち力を添えて下さつたならば同趣味者として相互に被る便益は淺からぬものと考へます。山岳、スキー、旅行に關するこまなれば何事によらず此の雜誌を利用せられん事を祈ります。紀行文、意見、研究、其他何種のものでも原稿は全て一行廿二字語、行を改むる時は一字下げる事。
× 寫眞は印畫一枚を送つて下さい。題名、撮影者其他その寫眞に關する事なるべく詳細に書添えて下さい。
× 又各地状況の通信は一片の葉書でもお知らせ下さい。
× 原稿の取捨は編輯者にお任せ下さい。投稿に關しては出来るだけ御相談に應じたいと思ひます。
× 本會に關する一切の事柄は別記事務所に就き御照會を乞ふ。
× 山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志部員の組織して居る會です。

大正拾年六月廿四日印刷
同 六月廿五日發行

毎月二回發行
一部金拾錢

編輯者 板橋敬一郎
印刷所 札幌區北一條西二丁目 札幌印刷株式會社
發行所 札幌區南一東四丁目中野方 山とスキーの會

秀麗である。西岳、梅花皮、地神、夜澤、聞覺等が夥しい雪を戴いてゐる。玉川の氷も玲瓏と澄み切つてゐる。これを遡つて川入部落を過ぎ人又澤と檜山澤の出合から尾根にとりつくのである。小玉川温泉も立派な根據地となるらしい。自分は玉川を未明に出て十時頃から峯にかゝり頂上の見ゆる附近に行つて露營したのであつた。道が善かつた爲一人で登れたが案内者は矢張り必要である。途中の眺望の美しさには心が動いて了ふ。峯は随分上り下りして水もなしい暑い尾根ではあるが、附近の山の眺によつて常に慰められる。オホバコスミレやオホサクラサウが堪らなく可愛らしい。偃松帯に入ればイワギキヤウ、ムシトリスミレ、エーデルワイスが美しい。大した苦勞もせずして頂上に出られる。只残雪の上を歩く時は恐ろしい。この道位趣味のあるところは無いであらう。檜山澤の雪谿、地神の雪谿等の雄大には驚かずには居られない。名も知らぬ高山植物も澤山にある。この道は完全に飯豊を代表するものと考へられるのである。最後にこの登路を登山家に勧め是非見逃されぬことを願ふのである。

一九一六から毎年この山奥中に入つて居つたが、何も獲る所のないのは恥しい位である。日本アルプスから傾向が東北に向ふのを切望するものである。

X X X

有明口登山案内者組合賃金表

(大正十年度ノ標準)

案内者金貳圓參拾錢(入山中ノ一切ノ資料ハ登山者ノ負擔トス)

常念山脈 (1) 有明驛 中房温泉 ▲有明温泉 燕小屋 ▲中房 ▲二ノ俣小屋

大槍線 (2) 中房 常念坊 ▲燕小屋 槍澤小屋等ハ壹日賃金 ▲大槍小屋 ▲燕小屋 ▲大槍小屋ハ壹日賃金

(3) 大槍小屋槍澤小屋及常念坊等ヨリ上高地ハ壹日賃金

(4) 上高地及白骨温泉ヨリ信濃鐵道一日市場迄ハ日賃金

金參圓 (5) 上高地 平湯温泉 ▲上高地 (白骨) ▲平湯 乘鞍頂上 白骨等ハ壹日賃金

乘鞍線 (6) 夜間ノ勞務ハ倍賃金ヲ申シ受ク 荷物ノ輕重ニ依リ登山者ト相談ノ上相當ノ賃金ヲ申受クルコトアルベシ

(7) 入山中暴風雨ニ遭ヒ露營地若シクハ宿泊地ニ終日籠城スル場合モ規定賃金ヲ申シ受ク

(8) 北安大町方面ハ大町登山案内者組合規約ニ基キ賃金ヲ申シ受ケ信濃鐵道大町驛ヨリ有明驛ノ往復ノ汽車賃ヲ申受ク

其ノ他ハ日程ニ應ジ相當ト認メタル日備ヲ申シ受ク荷物ノ負擔重量ハ普通五貫匁内外トス

但シ時宜ニヨリ此ノ限リニアラズ

信州南安曇郡有明驛前

有明登山案内者組合出張所